



TITLE:

# 滿洲移民の特異性と掃匪問題

AUTHOR(S):

山本, 美越乃

---

CITATION:

山本, 美越乃. 滿洲移民の特異性と掃匪問題. 經濟論叢 1937, 44(5): 1-9

ISSUE DATE:

1937-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130955>

RIGHT:

神戶博士  
還曆祝賀  
記念論文集

京都帝國大學經濟學會

昭和十二年五月一日發行

# 經濟叢論

第四十四卷 第五號

(通卷第二百六十三號。禁轉載)

奉  
呈

神戶正雄先生

執筆者一同

## 目次

滿洲移民の特異性と掃匪問題	法學博士 山本美越乃	一
農家の負債と負擔能力	法學博士 河田 嗣郎	〇
現代社會學に於けるパレット社會學の地位	文學博士 米田庄太郎	三
幕末の商稅論	經濟學博士 本庄榮治郎	五
實際政策と政策原則	經濟學博士 作田 莊一	六
『維新の詔』に於ける變革の國是	經濟學博士 石川 興二	九
シュレーデルの王室金庫論	經濟學士 小山田 小七	七
アダム・スミスに於ける自由主義社會の理念的構造に就いて	經濟學士 中川與之助	二三
工場内勞働者教育事業の目的	經濟學士 大塚 一朗	二九
アフタリヨンの貨幣心理說に就いて	經濟學士 松岡 孝兒	一四
明治初年の官營産業に就いて	經濟學士 堀江 保藏	一四
財政學の基本問題	經濟學士 大谷 政敬	一八
取引所實物化論と短期清算取引の應用に就いて	經濟學士 今西庄次郎	三〇
貨幣の中立性に關する一考察	經濟學士 中 谷 實	三八
リストの國民生産力說	經濟學士 白杉庄一郎	三四
財政學と經濟政策論との交流	經濟學士 島 恭彦	三五

生産の構造と貿易	經濟學士 松井 清	三九
租税の農業に及ぼす影響	經濟學士 山岡 亮一	三八
再保険と共同保険との接近	經濟學士 佐波 宣平	三三
耕地管理組合に就いて	經濟學博士 八木芳之助	三五
熊澤蕃山研究序説	經濟學博士 黒 正 巖	三六
水産經濟學と其の課題	經濟學博士 蜷川 虎三	三五
輸入制限と國內物價との關係	經濟學博士 谷口 吉彦	三六
昭和の税制改革	經濟學博士 汐見 三郎	三八
自然利子論	文學博士 高田 保馬	四〇
財政學者の鐵道經濟に關する研究論著に就いて	商學士 武藤 長藏	四四
現段階に於ける租税體系	經濟學博士 土方 成美	四五
支那南北辨	法學博士 財部 靜治	四七
赤字公債の消化	經濟學博士 小島昌太郎	五二

神戸博士  
還曆祝賀

# 記念論文集

(經濟論叢第四十四卷第五號)  
昭和十二年五月發行

## 滿洲移民の特異性と掃匪問題

山本美越乃

滿洲事變の直後吾人が滿蒙移民の重要性を提唱したる時代には、世論の多くは之を一笑に付するか、然らずんば其の實現の可能性に乏しき理由を擧げて反對したものであるが、現今に於ては中心之に同意を表せざるまでも、少くとも公然之に反對せんとするが如き有力なる説を見出し得ざるまでに滿蒙殊に滿洲移民問題に對する世人の認識に一大變化を來たしたることは、日滿兩國の親善提携の爲にも欣ぶべき現象であると言はねばならぬ、加之、曩には日滿兩國政府の特別の保護の下に一大拓植會社の計畫せらるゝあり、斯くして滿洲移民問題は今や論議の時代を過ぎて實行の軌道に乗り來たれるを以て、吾人は此の機會に滿洲移民が他の移民例へばブラジル移民等と異なる特殊性を有すること、及び其の前途に横たはれる難關中殊に人爲的の障礙に對して、如何にせば之を克

服し得べきかとの問題に關し、卑見の一端を述べて爲政者並に直接其の衝に當りつゝある當事者の參考に供したいと思ふ。

滿洲移民も亦一面より之を觀察する時は、農・林・鑛等の天然資源の開發利用を目的とする所謂産業移民たる點に於ては、他の移民と何等異なる所なく、又斯かる點に重心を置ける滿洲移民の重要性に關する議論は、今日に至るまで既に論議し盡くされたる所なるを以て、茲に之を再説するの要を見ない。

元來産業移民の特徴は人力によりて自然力を征服することに依存し、氣候・風土・猛獸・毒蛇等の不斷の暴威に對して、之を克服制禦して人類の安住の樂土を建設せんとするに在る、滿洲移民も固より此の一般産業移民の特性を具備すべきことは勿論なるも、此の上に更に人爲的の脅威即ち滿洲各地に出沒營ならざる匪賊に對する不斷の鬭爭克服を覺悟しなければならぬ所に、他の一般移民の通有的特徴と異なるものがある、換言せば滿洲移民は一面産業上の開發に當らざる可からざると共に、他面之が開發に不斷の脅威たるべき匪賊に對する鬭爭克服の重大なる任務を有して居るものであると言ふことが出来る。此の意味に於て滿洲移民は所謂屯田的の移民（屯田兵の制度を加味せる移民）たらざる可からざること、殆んど議論の餘地のなき所である。

然るに屯田的の移民を實行せんと欲せば、勢ひ豫備後備の軍人を中心として移民團體を組織せしむることが最も捷徑であるが、過去に於ける我が滿洲移民の實驗に徴せば、豫備後備の軍人を中心とせる移民團體の構成には、其の實行上に種々の困難を伴ふものあるのみならず、移民地に於ける彼等の實績に關しても、必ずしも豫想と相合致せざるものがあつたように思はるゝ、故に屯田的の移民主義は之を肝要とするも、其の構成には軍人以外



の普通移民をも之に交へて、平時事無き時に於ては農耕其の他の産業上の開發に従事せしむるも、一朝有事の日には銃を手にして匪賊の討伐及び國境守備の任に當り得べき資格ある者をして、移民團を構成せしめざる可からざると共に、他面匪賊の討掃に關しても吾人は從來の方針に對して更に深慮を加へざる可からざるものがあると思ふ。

## 二

滿洲事變の直後滿洲移民問題の議起るや、吾人は滿洲の實情よりせば移民問題と掃匪問題とは互に相關性を有し、如何に移民の必要を唱ふるも匪賊問題に對する當局の解決方法にして宜しきを得ざらんか、移民の前途は頗る不安に曝さるべきことを提言したるに、當時軍部當局の意見として發表せられたるものに依れば、匪賊討伐問題の如きは兩三年を出でずして解決すべく、斯かる點より移民の前途に不安を與ふるが如き事はなかるべしとのことであつた、併し吾人は滿洲匪賊に對する認識の根本的の相違より容易に此の如き説に服することを得なかつたのである、蓋し滿洲に於ける匪賊なるものは掠奪行爲に或種の習癖又は興味を有し、之を以て一種の職業若くは副業の如くに看做せる滿洲特有の團體であつて、彼等の中には朝に良民となり夕に匪賊に轉ずる者も決して少なしとしない面從腹背當ならざる者の集團に過ぎざるが故に、之が討滅は決して容易の業ではない、故に單に威力を以て之に臨むのみでは討掃の業は恐くは百年河清の嘆に終るであらう。

由來新發展地に於ける人爲的の障礙、例へば蠻族の反抗又は匪賊の襲來等に對する討掃策として、從來採用せられたる主義には二つある、即ち其の一つは單純なる威壓的の討伐主義であつて、他は能ふ限り之を懷柔歸服せ

しめんとする恩威並行主義之である、而して之を各國に於ける過去の實驗に徴するに、前者は一時的には成功せるが如くに見ゆるも、其の結果に於ては土着住民の信頼を購ふに足らざるに反し、後者は當初の實績よりせば極めて遅々たるが如き感あるも、結局は民心を收攬して彼我の關係を好轉せしむる機會を與ふる場合が甚だ多い。

加之、武力に依る討伐主義は、一は地の利に依り他は其の匪賊の性質に依りて決せらるゝ問題であつて、例へば臺灣の如き地の利を得たる所に於ては、蠻族の脱出を防止せんが爲に蠻界に電氣鐵條網其の他之に類する適當の設備を爲して之が討伐に當るが如きことも決して不可能ではない、又彼等は其の背後に之を操縦使喚して時には武器彈藥を供給し、又時には糧食資金等を給與して、其の對抗力を頑強に支持せしめんとするが如き隠れたる魔手の動きを有しない、故に假令高山深谷に神出鬼没の特技を演ずるも、結局は囊中の鼠族に等しき運命に陥るより他はないのであるが、滿洲に於ける匪賊は此の點に於て著しく異なつて居るのである、即ち絶海の一孤島唯僅かに斷崖を辿りて一路海洋に脱出の途を索むるより他なき臺灣蠻族の如きと異なり、追撃愈々急なれば廣茫萬里の大陸的奥地に蜘蛛を散するが如くに逃遁し、一度追撃の手を弛むる時は、烏合の衆は再び結束して其の虚を衝かんとするが如き、地の利は寧ろ匪賊に在りて我に存せざるのみならず、彼等の背後には動もすれば蘇聯の魔手の之を操縦せんとして其の機會を狙ふものがある、滿洲匪賊が時に比較的優れたる武器彈藥を有し、且つ糧食等に於ても比較的潤澤なるものと稱せらるゝは、此の如き背後的關係に於て亦無視すべからざるものゝあることを常に考慮に入るゝ必要がある、故に之を討滅せんとするが如きことは決して一部人士の考ふるが如くに容易の業ではない、固より之が爲に要する討伐費の如きは敢て問ふ所にあらず、又之が爲に失ふ所の貴重なる人

命の如きも、日滿共存の大目的よりせば深く念とするに足らずと云ふが如き、猪突的の計畫を所謂「斷」の一字に依りて遂行せんとするならば、吾人又何を言はんやであるが、併し此の如き無謀の計畫は結局莫大なる國費と貴き人命とを損する以外に、何等日滿兩國の前途を明朗ならしむるものではない、故に掃匪問題の將來に關しては今や再検討を要すべき時機に直面して居るように思はるゝ。

### 三

然らば如何なる點を如何に再検討すべきかと云へば、今日となりては時機聊か遅きの憾なきにあらざるも、尙ほ其の手段と方法とに依りては、之が轉回策全くなしとはしない、即ち單純なる討伐主義に代ふるに巧妙なる懷柔主義換言せば恩威並び行ふの主義を以てし、能ふ限り彼等の生活を保障して安んじて定業に就かしむる方針を以て、極力之を誘掖善導する方法を採ることが夫れであるが、併し多年掠奪鬭争をのみ事とせる彼等を從來の如く各所に割據せしめて集散的に居住せしむることは策の得たるものではない、故に一面彼等に土地を與へて農耕・牧畜等の定業に従事せしめ、其の生活の安全を保障すると共に、他面彼等と能ふ限り混住雜居して直接間接に彼等を指導し、其の非行を漸を逐ふて改悛せしむるよう日滿兩國の移民を配置すべきで、之には所謂豫備後備の軍人に土地を與へて、平素事無き時には彼等と提携して農牧の業に従事せしむるも、一朝不穩の行動に出づる時は之を制止し鎮撫せしむる目的を以て、滿洲移民の構成を現在以上に掃匪問題と關聯せしめて再検討を加ふることが、刻下の急務でなからうかと信ずる。

最近關東軍の報告として傳へらるゝ所に依れば、滿洲事變の直後三十萬を以て數へられたる匪賊も、近時は其

の數一萬に過ぎざる程に掃匪事業は成功せるが故に、此の狀勢を以てせば彼等の全滅に依る王道樂土の建設は、近き將來に期待し得べしとのことであるが、吾人は遽かに斯かる言を信じ得ない、此の如き言明が眞實なりとせば、夫は前にも述べし如く滿洲事變の直後軍部當局が匪賊の討伐の如きは兩三年を出でずして解決すべしと言へるに等しく、匪賊を以て恰も滿洲に於ける一種特別の階級又は民族の如くに看做せる謬見より出でたるものであつて、固より此の如き一種特別の社會階級の存在すると云ふことも認め得られない譯ではないが、併し滿洲匪賊の特色は之を普通民と區別することの困難なることであつて、其の多くは朝に普通民を裝ひ夕には匪賊團と化すること決して稀ならざるのみならず、寧ろ之を彼等の常態と稱しても可い位である、食ふに糧あり用ゆるに財ある時は良民として他と異なる所なきも、一度其の糧と財とに缺乏を感じ來る時は、忽ち匪賊と化して掠奪を擅まゝにせんとする彼等の習癖を矯正せんと欲せば、單に武力に依頼せんとする威壓主義のみを以ては到底完全に其の目的を達し得ない、一面彼等に對して糧と財とを得せしむる方法を講ずると共に、他面動もすれば彼等の多年の習癖に墮せんとする傾向を警戒し防止する方策を執ることが肝要であり、又賢明なる對策であると言はねばならぬ。

而して斯かる目的を達する最良の方法は、豫備後備の軍人に配するに普通移民を以てする移住團を組織せしめ、之を彼等の間に配置して集團的の部落を構成せしむるに如くものはないと考へる、或は曰く、豫後備の軍人軍族の移民團の組織は既に試験済みであつて、彼等は少くとも滿洲國に於ては移民としての適性を認むることを得ないとの説をなす人があるが、吾人は卒かに此の説に服することは出來ぬ、何となれば若し此の説にして眞なりと

せば、軍部當局が聲を大にして天下に號呼する所謂肅軍なるものは、結局一種の幻影に過ぎざるものゝ如き感を感じしむるに至るからである、軍人は現役たると豫後備たるとを問はず、常に其の身を持つること厳正にして、一朝有事の日には挺身以て國難に當るの覺悟がなくてはならぬ、然るに現役中は其の身を持つること嚴正恪勤であるが、一度豫後備に編入せらるゝ時は放縱自恣にして規律を重んぜず、從て移民事業殊に滿洲移民の如き忍耐と規律とを重んぜざるべからざる事業には不適當であるとの批評を受くるようでは、廣義に於ける肅軍の眞意は上下を通じて徹底して居るとは言ひ得ない、身體強健にして千辛萬苦に堪へ、一般民衆に率先して荊棘を拓き身命を賭して其の範を示すと云ふのでなければ、唯徒に軍人軍族たる榮譽と地位のみを利用して驕慢放恣の生活を擅まゝにせんとするのでは、所謂廣義肅軍の意義には副はぬからである、過去に於ける豫後備軍人に依りて組織せられたる移民團の豫期の成果を挙げ得なかつた事情には、種々の理由があるであらうが、其の最も大なる理由の一は、彼等の間に堅忍不拔の精神と武士的信念換言せば挺身報國死生一如の確乎たる信念の缺けて居つたことが、移民團の不評を齎した重大なる原因であると稱しても決して過言でない、併し過去の失敗は將來に對する好訓として吾人の記憶に止むることは可なるも、之を以て豫後備の軍人に依る移民團の組織は、將來と雖も全く其の見込なきものゝ如くに考へることは誤りである、否掃匪問題に對する前述の理由は、豫備後備の軍人に依る移民團の組織を最も必要と感ぜしむる状態に現に直面して居るに於ては尙更のことである。

#### 四

加之、掃匪問題は姑く別とし所謂日滿共存一體の見地よりするも、對滿軍事工作の爲に恐くは我が軍事費の膨

賑は歳と共に益々嵩加せんとする状態にあることは免れ難い所であらう、然るに之が對策を講ずるに當りて師團の増設其の他之に類する方法に依り、單に現役軍人のみに依りて防備の任に當らしめんとするが如きことは、極めて非經濟的なる軍事工作与稱せざるを得ない、我が國に於ける人口過剩問題・除隊軍人の就職難問題及び日滿共防共衛問題等の全視角より、對滿軍事工作を最も經濟的に實行して國防と財政經濟との調和を計り、國民の軍事費負擔を能ふ限り輕減せしめんとする主旨よりするも、豫備後備の軍人に土地を與へて滿洲に移住せしめ、平時は耒耨を肩にして農耕の業に従事せしむるも、一朝有事の日には劍銃を手にして國防の任に當らしむることは、極めて有意義なる方法であると言はねばならぬ、然るに此の點に付きても説をなす者あり曰く、除隊軍人を滿洲各地に移住せしめて農耕兼防備の任に當らしめんとすることは、一舉兩得の策の如くに見ゆるも實は然らず、除隊者を督勵して防備の任を完ふせしめんと欲せば、現役者と同じく常に之を訓練して日に新なる戰術と精銳なる武器の使用に習熟せしめねばならぬ、併し此の如き訓練と習熟とは除隊者に對しては到底完全に之を期待し得べくもない、故に斯かる提言は要するに机上の空論に過ぎぬと。

軍事専門家の見地よりせば此の説は或は相當の理由を有するものであるかも知れぬが、併し決して全面的の眞理として世人を首肯せしむるには足らぬ、何となれば若し此の説の如くんば所謂在郷軍人なる者は、一朝有事の日には何等の役にも立たざることゝなるからである、現に國內に於て除隊者を時々召集して訓練を爲さしむると同様の方法に依り、滿洲に於ても農閑時を利用して軍人移民團の再教育再訓練に對する注意と方法とを怠らなかつたならば、國內に於ける在郷軍人と同じく一朝有事の日には現役者を補佐して防衛の任務を完ふせしむること

とを得る筈である、國防學上の根本原則も亦一般經濟學上の根本原則に於けると同じく、能ふ限り最少の費用を以て最大の効果を擧げしむることに常に注意すべきで、師團を増設し或は現役兵を増駐せしめて國防の充實を計ることも時と場合に依りては必要であるかも知れぬ、併し又豫備後備の軍人を移植せしめて、人口問題及び職業問題の解決に資すると共に經濟的國防策の樹立を計ることも、現下の我が國の一般狀勢殊に財政上の過重の負擔を救済する點よりして特に考慮を要すべき大問題であると言はねばならぬ。

往昔ローマの隆盛を極めたる時代に在りてすら、國外各地に於て得たる新領土並に新勢力圏内の秩序を維持し、邊疆守備の任務を負はしむると共に、又一面彼等に職業を與へて其の生活を保障せんが爲に、豫備後備の軍人に土地を與へて屯田組織の移住政策を實行したることが、偶ま現今のコロニーの語原を成せるコロニアなる移住團を生むに至れる故智に倣ひ、滿洲匪賊問題の解決と共に滿蒙滿蘇の國境防備の任務を單に現役軍人の手にのみ委ね、之が爲に年々莫大なる軍費の支出を餘儀なくせらるべき現狀に對しては再檢討を加へらるべきで、之を遇するに其の途を以てせば比較的容易に平靜に歸せしめ得べき匪賊の討伐に、現役軍人の貴重なる生命を犠牲に供するのみならず、之が爲に國庫の負擔を嵩加せしむるも敢て辭せざらんとするが如き防衛計畫は、早晚修正せらるべき時が來るべきであり、又來らせなければならぬものであらうと思はるゝ。